

第1回19世紀イギリス文学合同研究会

日時 2023年11月4日(土) 13:00~18:00
場所 関東学院大学 横浜関内キャンパス9階 YK-901教室
〒231-0031 横浜市中区万代町1-1-1
電話 045-264-4311(代表) 大学HP: <https://univ.kanto-gakuin.ac.jp>

日本ハーディ協会庶務委員長
総司会 東京都立大学教授 亀澤 美由紀

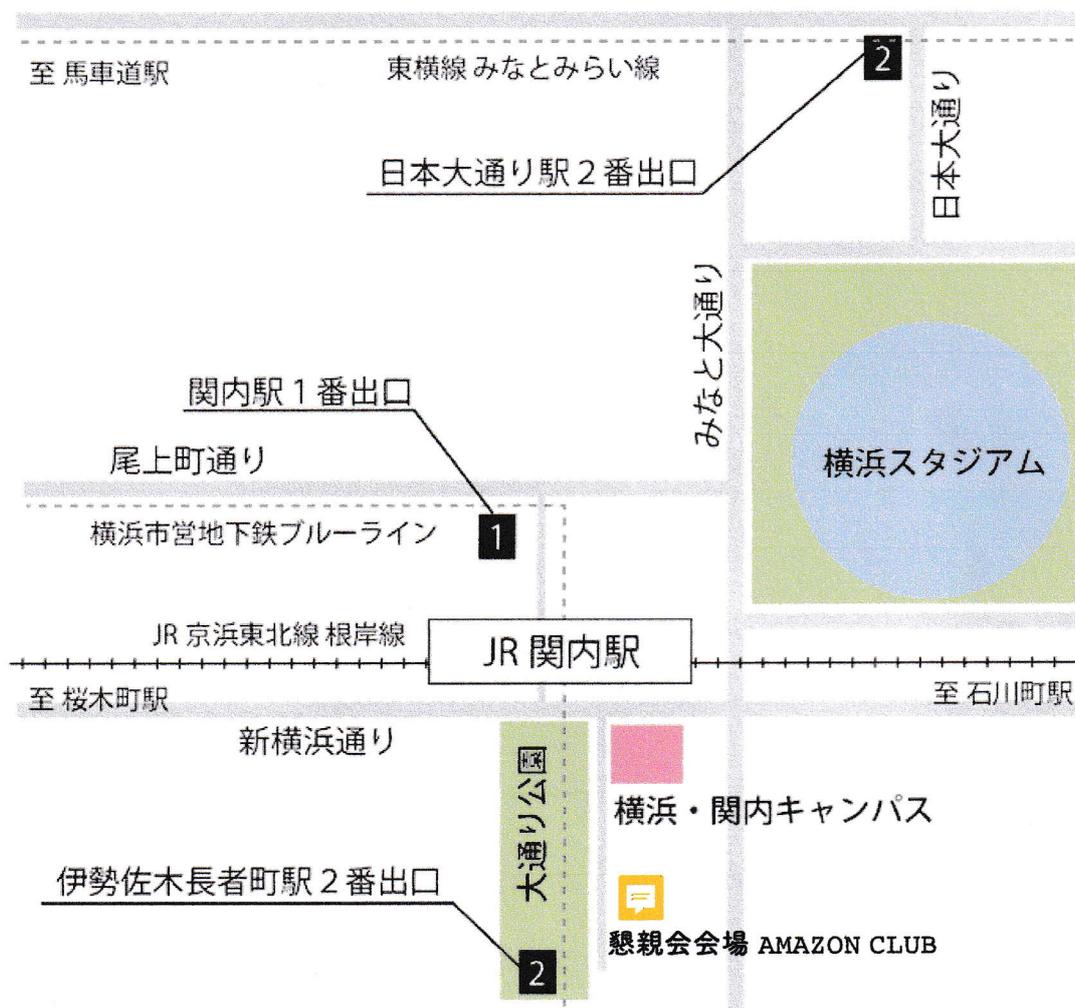
開会の辞	(13:00)	神戸市外国語大学名誉教授・ノートルダム清心女子大学教授	新野 緑
研究発表	(13:05~13:40)	司会 立正大学教授 大野 龍浩	静岡英和学院大学短期大学部教授 芦澤 久江
1	シャーロット・ブロンテの交流 —エレン、ギヤスケル宛の手紙を中心に—		
研究発表	(13:40~14:15)	司会 東京大学教授 新井 潤美	跡見学園女子大学非常勤講師 梶山 秀雄
2	クリスティーは20世紀のディケンズか? —田園殺人となりすましの主題—		
休憩	(14:15~14:20)		
研究発表	(14:20~14:55)	司会 阪南大学教授 杉村 醇子	福岡大学准教授 福原 俊平
3	共感と契約 —トマス・ハーディ『森林地の人々』における進化論のアイロニー—		
研究発表	(14:55~15:30)	司会 青山学院大学教授 田中 裕介	三重大学准教授 関 良子
4	モリスを代弁するワイルド —1882年北米講演ツアーに潜在するアーツ&クラフツ運動—		
休憩	(15:30~15:45)		
シンポジウム	(15:45~17:55)		
	19世紀イギリス文学における同性間の交流とコミュニケーション		
	講師 同志社大学教授 玉井 史絵		
	講師 松山大学教授 矢次 綾		
	司会・講師 名古屋学院大学教授 西村 美保		
	講師 群馬大学准教授 金田 仁秀		
閉会の辞	(17:55)	日本ハーディ協会会長・西南学院大学教授	金子 幸男
諸連絡	(18:00)		

- ※ 19世紀イギリス文学合同研究会に午後から参加の方の受付は、12時20分から開始します。受付は混みあうことが予想されますので、早めにお済ませください。なお、午前の日本ハーディ協会大会から参加され、そのまま合同研究会にも参加される方は、午前のうちに合同研究会の受付もお済ませください。又、懇親会に参加される方は、受付の際に懇親会費をお支払いください。
- ※ 休憩室(関内キャンパス9階 YK-902教室)を用意しておりますが、教室内での食事は禁止となっておりますので(ペットボトルの持ち込みは可)、飲食物を持参される場合は9階ラウンジ(飲食可)でお召し上がりください。それ以外の場所で飲食される場合は、1階の「Nathan-Coffee 1884」あるいは地下1階の「BACON Books & Cafe」をご利用いただくか、大学近隣の飲食店をご利用ください。
- ※ 発表者控室は関内キャンパス11階 YK-1104教室です。
- ※ 新型コロナウイルス感染症の拡大状況によっては、リモート開催に変更させていただく場合もございます。
- ※ 19世紀イギリス文学合同研究会への出欠確認については、別途ご案内いたします。合同研究会の会員以外の方で当日参加を希望される方は、合同研究会事務局までご連絡ください。
- ※ 日本ハーディ協会大会懇親会も兼ねた19世紀イギリス文学合同研究会懇親会を開催します。懇親会会場については別途ご案内します。
- ※ 当日は、感染対策にも万全を期し、密にならないよう十分に広い会場で行います。マスクの着用は参加者の皆様の判断にお任せしますが、室内で密になる場面がある場合には、着用をお勧めします。発熱や咳、倦怠感などの症状がある場合は参加をお控えください。
- ※ 当日のゴミは必ずご自身でお持ち帰りいただくようお願いいたします。
- ※ 第1回19世紀イギリス文学合同研究会の運営主体は日本ハーディ協会です。

問い合わせ先: 日本ハーディ協会内 19世紀イギリス文学合同研究会事務局
〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町16-1 関西外国語大学 橋本史帆研究室内
メールアドレス: shashi@kansaisaidai.ac.jp

主催 19世紀イギリス文学合同研究会
(日本ギヤスケル協会、ディケンズ・フェロウシップ日本支部、日本ハーディ協会、日本ワイルド協会)

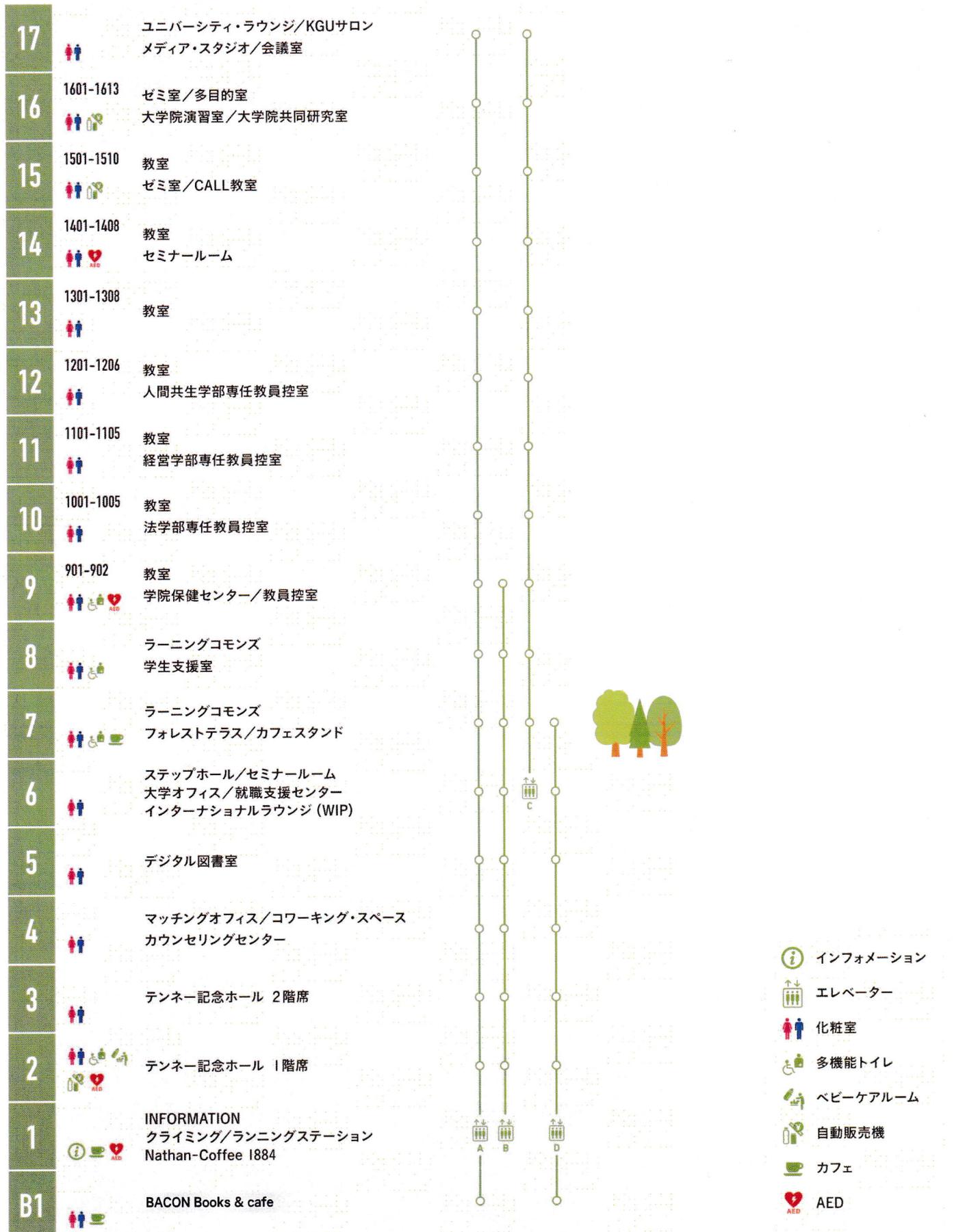
横浜	5分	関内
	JR京浜東北線 根岸線	
横浜	5分	関内
	横浜市営地下鉄 ブルーライン	
横浜	7分	日本大通り
	東急線 みなとみらい線	



横浜・関内キャンパスの最寄り駅は、JR 京浜東北線 根岸線及び、横浜市営地下鉄ブルーラインの「関内駅」。横浜から約5分、東京駅からも約40分に位置します。また、東急線 みなとみらい線の「日本大通り駅」も利用可能です。

JR 関内駅南口駅前に位置し、関内駅からは徒歩約2分、日本大通り駅からは徒歩約8分です。

※ 懇親会の会場 AMAZON CLUBは、JR 関内駅南口より徒歩3分／横浜市営地下鉄 伊勢佐木長者町駅より徒歩3分
〒231-0031 神奈川県横浜市中区万代町2-4-1 東カン横浜パークサイド 201
URL: <http://www.amazon-club.com/>



- インフォメーション
- エレベーター
- 化粧室
- 多機能トイレ
- ベビーケアルーム
- 自動販売機
- カフェ
- AED

《第1回 19世紀イギリス文学合同研究会 研究発表》

シャーロット・ブロンテの交流

——エレン、ギヤスケル宛の手紙を中心に——

静岡英和学院大学短期大学部 教授 芦澤 久江

シャーロット・ブロンテの残存している手紙のなかで、もっとも多いのは友人エレン・ナッシーに宛てたものである。このエレン宛の手紙は、ギヤスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』の主要部分となっているが、エレンとの文通がシャーロットの成長に果たした役割はあまり指摘されていない。実はエレンとの文通は、シャーロットの精神修養に大きな影響を与えていると思われる。

ヴィクトリア朝時代において、女性同士の友情には特別な意味があった。結婚を人生のゴールとしていた当時、友情はどのように人を愛せばよいか、幸せな結婚へ導く練習の機会として、若い女性に奨励されていた。したがって、礼節、上品さを旨としたヴィクトリア朝時代にあつて、女性が男性に対して禁じられていたあからさまな愛情表現を、女性の友人に対しては堂々とする事ができたのである。

一方作家として交流のあつたギヤスケルへの手紙はどのようなものだったのだろうか。シャーロットは作家として、ギヤスケルを尊敬はしていたが、エレンに対するような愛情表現は見られない。したがって、エレン、ギヤスケル宛ての手紙を比較しながら、エレンとの友情がいかに特別なものであつたのか、またそれがいかにヴィクトリア朝時代のイデオロギーに即したものであつたかということをも明らかにしたい。

クリスティーは20世紀のディケンズか？

——田園殺人となりすましの主題

跡見学園女子大学 非常勤講師 梶山 秀雄

「ミステリの女王」アガサ・クリスティーが、幼少期に多くの文学作品に触れていたことはよく知られており、その中にはチャールズ・ディケンズの名前も含まれていた。とりわけ『荒涼館』(1852-53)を愛読しており、作家としてデビューした後は、登場人物関係の複雑さによって頓挫したものの、脚本化に着手したほどだったという。殺人事件をプロットの中心に据えた『バーナビー・ラッジ』(1841)をめぐるのは、「探偵小説の始祖」エドガー・アラン・ポーが真相のトリックを看破して、ディケンズを驚かせたというエピソードも残っているように、ディケンズの作品群には遺作『エドウィン・ドルードの謎』(1870)は言うまでもなく、ミステリ的な要素が読み込み可能なものが少なくない。他方、ノーベル賞作家カズオ・イシグロは『私たちが孤児だった頃』(2000)で主人公を探偵に設定した動機として「1920年代のミステリ黄金時代の作品に惹かれた」と述べているが、それまで平

和だった村で事件が起こり、颯爽と登場した探偵によって解決されるという図式は、クリスティーの作品、とりわけミス・マーブルシリーズに顕著である。本発表では長編『予告殺人』(1950)をテキストに、トリックの中核となる、なりすましの主題が、いかにディケンズからクリスティーに継承されたかを論考する。また、このテーマの現代的な意義と映像不可能性についても、アダプテーション理論の観点から考察してみたい。

共感と契約——トマス・ハーディ『森林地の人々』における 進化論のアイロニー

福岡大学 准教授 福原 俊平

トマス・ハーディの『森林地の人々』には進化論の影響が見られ、外部からやってきた登場人物が小さな共同体にもたらす変化の波紋が描かれている。プロットの大枠としては、自然選択によってジャイルズ・ウィンターボーンが淘汰され、共同体が文明化されるという進化論的な流れに沿っている。しかし、この小説においては、進化や文明化は道徳的な「向上」を意味していない。ハーディは進化という過程を自然界や宇宙の原理として認識していたものの、彼にとっての進化は進歩という垂直的な上昇ではなく、水平的なものであった。とりわけ、道徳という観点では、進化しているはずの人々の方が、道徳的に劣っているという逆転現象が生じている。本発表では、この小説における共感に基づく関係性と契約による関係性に注目して、ハーディ的進化論の逆説を分析する。ハーディが伝統的な森林地の人々を描く際に強調されるのは自然との共感であり、その共感はテレパシーのように村人たちの間にも通い合っている。それに対して、外部からやってきたエドレッド・フィッツピアーズのような人々は、金銭的契約を重視している様子が繰り返し描かれている。本論では、『森林地の人々』において、進化の過程で共感が契約にとって代わられる様子を例証しながら、ハーディにおける道徳の逆説とアイロニーを分析していく。

モリスを代弁するワイルド

—1882年北米講演ツアーに潜在するアーツ&クラフツ運動—

三重大学 准教授 関 良子

1882年の一年間をかけて行われたワイルドの北米講演ツアーの目的は、サヴォイ・オペラの一つ『ペイシャンス』(*Patience*, 1881)のアメリカ公演に際し、この喜劇が風刺の対象とする唯美主義の神髄を、アメリカの聴衆に説くことであった。サテンの膝丈ズボンに黒のシルクストッキング、銀のバックル付きの靴にレースの縁取りをしたヴェルヴェットのコートという出で立ちで登場したワイルドは、まさに唯美主義を具現化した存在として聴衆の前に現れ、約140回にのぼる講演をアメリカ及びカナダ各地で行った。

この北米講演ツアーは、文人ワイルドの地位を確立させた事象として広く知られているが、その講演内容が北米滞在中に変化していることに関しては、あまり研究的関心が寄せられていない。注目すべきは、当初は観念的、あるいはペイター的な唯美主義観を論じていたワイルドが、「芸術のための芸術」よりも、「生活の中の芸術」の重要性を訴えるアーツ&クラフツ運動の主張へと徐々に変化している点である。講演原稿の中には“Have nothing in your house that is not useful or beautiful.”という、モリスが1880年にイギリスで行った講演「生活の美」(“The Beauty of Life”)の中での主張からの、明らかなエコーすら見られる。本発表では、ワイルドの北米講演ツアーの間に起きた主張の変化に注目する。その過程で、「芸術のための芸術」と「生活の中の芸術」の間の接合面を精査することが本発表の狙いである。

《第1回 19世紀イギリス文学合同研究会 シンポジウム》

19世紀イギリス文学における同性間の交流とコミュニケーション

司会・講師	名古屋学院大学	西村 美保
講師	同志社大学	玉井 史絵
講師	松山大学	矢次 綾
講師	群馬大学	金田 仁秀

communication は「分かち合う」を意味するラテン語の *communicāre* を語源とする。19世紀は、ペニーポストの導入や帝国全土に広がる電信網の敷設など、コミュニケーション技術が飛躍的に進歩した時代であった。本シンポジウムでは、そのような時代である19世紀に人と人との意思疎通と関係性の構築がいかにかに表象されたかを、ディケンズ、ギャスケル、ハーディ、ワイルドの4人の作家やその周辺のヴィクトリア朝の作家を念頭に置きながら検討していく。

講師はそれぞれの角度から同性間・階級間・世代間など、様々な登場人物の交流がどのように描かれているのかを明らかにしていく。人々の交流から構築されるものとしては、友愛や互助精神、欲望、支配・依存・敵対関係、共通の娯楽や趣味を通じた経験、経済的利益、社会的貢献・運動、革命など多くのものが挙げられる。登場人物間の交流とコミュニケーションはどのような機能や意義を持ち、人間関係の構築に作用したのか。周囲（コミュニティや家族、社会、国家など）に対する影響や、当時の社会、あるいは作品世界における位置づけも考慮に入れて考察を深める。

A Tale of Two Cities における「怒り」と「癒し」のコミュニケーション

同志社大学 教授 玉井 史絵

本発表ではディケンズにおける階級間の情報と感情の伝達と共有に焦点を当てて、コミュニケーションの果たす役割を探っていく。ディケンズやギヤスケルといったヴィクトリア朝中期の作家たちは、貧しき者、虐げられし者への「共感」という感情の伝達を通じて、社会の分断を克服し社会を改革しようとした。しかし、彼らは同時に社会の安定を脅かしかねない労働者階級間での制御不能な情報と感情の伝達には強い恐怖や警戒心を抱いていた。

貧しき者、虐げられし者への共感と恐怖や警戒心といった矛盾する心理を解明する一助として、ディケンズがこうした労働者階級間の情報と感情の伝達をいかに描いたかを、フランス革命を題材とした小説 *A Tale of Two Cities* (1859) を中心に検討する。この作品では、パリとロンドンの間を登場人物が行き来し、伝言、暗号、手紙といった様々な媒体によって情報が伝達されることで、プロットが展開していく。また、フランスの民衆間での「怒り」と、イギリスのミドルクラスの人々との間の「癒し」という二つの対照的な感情の伝達が描かれている。こうした感情と情報の伝達を分析することにより、ディケンズにおける共感とその限界について考察する。

この作品に影響を与えたとされるインド大反乱 (1857) という歴史的コンテクストも踏まえ、労働者階級や異文化の人々といった「他者」のコミュニケーションに対する、ディケンズの複雑な感情を明らかにする。他のヴィクトリア朝作家たちの作品も視野に入れ、単なる作品分析に留まらない広がりのある内容としたい。

Wives and Daughters と *The Story of Elizabeth* における 女性人物のコミュニケーション不全とコミュニケーション

松山大学 教授 矢次 綾

本発表では、ギヤスケルの *Wives and Daughters* (1864-66) と、サッカリーの長女で、1860年代から70年代にかけて人気作家だったアン・サッカリー・リッチーの *The Story of Elizabeth* (1863) を遡上に載せる。その理由は、どちらの作品にも、母と娘のコミュニケーション不全とそれがもともになる問題が描かれているから、他の女性人物が娘とのコミュニケーションを通してその問題の解決に貢献しながら、自分自身の生き方や役割について思いを巡らせているからである。換言すれば、夫を亡くした後、若い男性に心惹かれながらも社会的地位のある別の男性と再婚し家庭に安住しようとする母 (*Wives* のハイアシンズ・ギブソンと *Story* のキャロライン・ギルモア) に対し、娘 (*Wives* のシンシアと *Story* のエリザベス) は顧みられていないという苦い思いを抱き、その思いを母に伝えられないまま短絡的に行動してしまい問題を抱える。娘と交流し問題解決に貢献するのは、*Wives* のモリー・ギブソンと *Story* のミス・ダンピエである。シンシアの義妹モリーは問題に巻き込まれ醜聞的となりながらも誠実な行動を心がけ、同時に自分自身の生き方を模索していく。母と娘の親戚筋にあたる年配の独身女性ミス・ダン

ビエはキャロラインに代わってエリザベスを庇護し、問題解決へと導いていくが、そうすることによって自分なりの役割を果たそうとしている。ギャスケルとリッチーは、女性の生き方が変化の兆しを見せ始めた時代の空気を敏感に感じ取りながら、以上の女性人物たちのコミュニケーション不全とコミュニケーションの様子、それらが及ぼす影響を描出したのではないだろうか。本発表ではこの点について吟味したい。

ヴィクトリア朝小説に見る“sisterhood”の希求と男性同士の “homosociality”について——*Far from the Madding Crowd* を中心に

名古屋学院大学 教授 西村 美保

結婚という制度を中心に社交が成り立ち、女性が男性の付随的立場にあったヴィクトリア朝社会では、女性同士の友情は将来の結婚生活を円滑に進めるための準備段階として捉えられるくらいで、そもそも関心が払われないう対象だったと言われている。ましてや、階級を越えた女性同士の互助関係や互助精神、いわゆる“sisterhood”に対する社会の認識は低かったと思われる。それを反映するかのように、ヴィクトリア朝小説では、多様な形で、女性登場人物の孤独、女性同士の友情、互助関係が描かれるが、救済の願望はあっても成就しないことも多い。“Sisterhood”の理想的な姿が提示される場合もあれば、その欠落が浮き彫りにされる場合もある。いずれにせよ、こうした多様な表象の中に“sisterhood”の重要性とそれを希求する作家のメッセージを読み取ることができるのではないだろうか。本発表では、こうしたテーマに焦点を置き、複数のヴィクトリア朝小説、先行研究、そして文化的コンテクストを吟味する。特に 1874 年にコーンヒル誌に発表され人気を博したハーディの小説、*Far from the Madding Crowd* に関しては、“sisterhood”についてはもちろんのこと、“homosociality”についても考察したい。というのも、上記作品では、“sisterhood”の欠落した社会において、どのような立場であろうと、女性がいかに孤独と不安に苛まれる得るかが描写されるが、男性の場合は飲酒を介在とした“homosociality”が確立され、少なくとも表面的には安心感のあるコミュニティが提示されているからだ。それでいて、他のハーディ小説においても見られることだが、男性間の“homosociality”が女性の生活と運命に影響を与える様も見て取れる。

同性愛的欲望の共有と伝達——快樂と抵抗のレトリック

群馬大学 准教授 金田 仁秀

イギリスにおいて 16 世紀から男性間の性的行為を罪と規定してきたソドミー法による取締りは、18 世紀後半から急増し、19 世紀へと引き継がれた。1861 年には死刑が廃止されたものの、これによってそうした行為や欲望への抑圧が決して軽減されたわけではなかった。むしろ 1885 年には刑法改正によって、私的、公的空間を問わずに“any act of gross indecency”が取締りの対象となった。同性愛行為は常に処罰の対象であり、監視の下にあったの

だ。しかしながら、このような状況の中で、19世紀を通して同性愛的欲望が根絶させられたわけでも、またその表現がまったく不可能となったわけでもなかった。サブカルチャーは依然として存在したし、19世紀後半にはヨーロッパ大陸を中心にいわゆる性科学も誕生し、同性愛擁護の声さえも聞かれ出した。また文学作品においても、古代ギリシャへの言及や比喻、美的昇華や異性愛との差異化といった方法で、同性愛的欲望は表された。さらには *Teleny* や *The Sins of the Cities of the Plain* といったより明白なポルノ小説も存在した。秘密の快樂は、それぞれのコンテキストに応じて、抑圧された故のレトリックを用いて共有されたのだ。本発表ではこうした歴史的、文化的状況を踏まえて、19世紀後半の同性愛詩やポルノ小説等を取り上げながら、それらにおいて同性愛的欲望がどのように扱われ、伝達されたのかを考察したい。そして、それぞれのテキストにおける逸脱的快樂の位置を探りたい。